

日本プロテオーム学会 (2021年～2023年理事)

2021年 第一回理事会 議事録

開催日時: 2021年1月27日(水) 9:00～12:00

会場: Zoom 会議

出席者(50音順, 敬称略):

「新理事」

足達俊吾、荒川憲昭、荒木令江、岩崎未央、奥田修二郎、大槻純男、小田吉哉、川島祐介、河野信、川村猛、紀藤圭治、木下英司、小迫英尊、小寺義男、小林大樹、杉山直幸、高尾敏文、武森信暁、田中恒平、堂前直、肥後大輔、増田豪、若林真樹

「旧理事」

足立淳、石濱泰、梶裕之、木村弥生、松本雅記、植田幸嗣、小松節子、榊原陽一、本田一文

欠席者: 川上隆雄、近藤格、

1. 会長挨拶(小寺)

理事(25名)変遷、学会沿革 についての紹介、学会運営における以下の留意点について確認がなされた。

- 日本におけるプロテオミクスプレゼンス向上、活性化を目指す。
- 若い人、新しい人が入会したくなる魅力ある学会を実現する。
- 各担当委員で役割を分担し、継続的な学会運営体制を作り上げていく。
- 自前で運営を行うコンパクトな学会運営(経費圧縮>安い会費)を維持する。

2. 新理事・自己紹介

各理事からの一言での自己紹介があった。

3. 理事役割分担について

(1) 理事役割分担

今回はWebでの開催とのことで、あらかじめ小寺会長より担当の打診があり、以下の担当役割分担が決定した。(前回から引き継ぎの理事14名の方に関しては、経験を考慮した役割分担となっている)

2021-23年度	理事	役割
小寺義男	会長 (Chairman)	JPrOS 代表、理事会、総会の開催
木下英司	副会長 (Vice Chairman)	会長の補佐、学会賞選考委員長
紀藤圭治	庶務担当理事 (Secretary General)	学会事務局となり、庶務関連業務を束ねる
足達俊吾	庶務(副)	

川島 祐介	庶務 (副)兼 教育	理事会、総会関連事務、電子選挙関連事務、規約管理、会員管理、学会年間行事の進行、学会通信、会計の補助、Web の管理
高尾敏文	監事 (Inspector)	会計監査
小田吉哉	監事 (Inspector)	
河野信(かわのしん)	広報(主)	会員を増やすための活動(国内のプロテオーム研究者の掘り起こし、学会への勧誘、協賛企業の勧誘)、他学会への協賛、後援依頼、研究室紹介、J-STAGE 登録、各 Webinar 広報
川上隆雄	広報(副)	
若林真樹	広報(副)	
杉山直幸	会計(主)	学会口座における出納を行う、監査用書類の作成、予算案、決算案の作成、年会費の徴収
荒川憲昭	会計 (副)	
小迫英尊	大会/年会(主)兼 教育	大会事務局、大会組織委員会との窓口、大会諸事の引き継ぎ
小林 大樹	大会/年会(副)	
荒木令江	学術企画(主)	各種学術企画の立案、他学会(分生、HUPO 等)でのプロテオーム関連セッションの提案、サテライトシンポジウム担当、データベース担当、Proteome Project
川村 猛	学術企画(副)	
岩崎未央	学術企画(副)	
近藤 格	国際(主)	KHUPO、HUPO、AOHUPO との連携、各国との窓口、海外研究者の招聘窓口、国際シンポジウムの開催、外国からの Webinar 等
田中恒平	国際(副)	
大槻純男	学会誌編集(主)	Web 学会誌 (Proteome Letters) の編集、発行 JPDM 誌の編集、発行
奥田修二郎	学会誌編集(副)	
武森信暁	学会誌編集(副)	
堂前 直	教育(主)	教育活動、若手サポート等、すそ野を広げる活動、学会主催技術講習会の企画、技術面に関する相談窓口など
肥後大輔	教育(副)	
増田 豪	教育(副)	

(2) 理事役割分担について小寺会長からの期待意見

監事:監事のお二人には、学会のご意見番としての立場も期待。

広報:Life Science Innovation Network(慶應大学、岡野先生主宰)、Yokohama Science Webなどの積極利用を期待。

大会/年会:自前のシステム利用、経費削減努力を通じて年会の継続を期待。

国際:コロナの影響もあり、小規模Webinarの開催を期待。

教育:教育を通じてプロテオームの活性化に力を入れたい(学会で育った働き場が広がることになり、さらなる発展に繋がる)、月に一度の小規模なWebinar(例えば第四金曜日などに固定して)の開催をおこない、会員、非会員も含めて参加を募り、学会員の増加にも繋がるような企画を期待。

(3) 監事からの意見

幹事意見1:

- 1、プロテオーム学会員は仲が良く、同じ方向を向いているのは良いことであるが、ダイバーシティーが少なく、外部からは参加しにくい雰囲気ができてしまっているのではないか？
- 2、プロテオームでは質量分析を用いる人が多いが、質量分析が主体となってしまつては、プロテオーム学会の良さが出ない。プロテオームを主体に考えることにより、質量分析以外の技術を持ったプロテオーム研究者を呼び込むことが可能となり、プロテオーム学会の立場をより明確化できるのではないか？

監事意見2:

- 1、質量分析は装置が完成されており、質量分析そのものよりも、手技が重要な要素となつてきている。手技だけではサイエンスとしては成り立ちにくく、今後どのようなサイエンスをするかということが問われている。
- 2、質量分析のデータ再利用の利便性が低いことが問題。昨今は論文発表する際にデータを登録する制度が確立してきているが、なかなか気楽にデータを利用できていない、最終的なデータの検索だけではなく、生データレベルの有効利用ができるシステムを期待。

補足(石濱前会長):JPOSTにおいてMaxQuant以外はcomplete submissionに対応しているためスペクトルまでweb上での確認可能にはなっている、この辺りの周知も必要。

(4) 各主幹事担当者コメント

広報:毎月のWebinarの広報により学会の多様性が高まるよう努力する。広報場所についての皆様のアドバイスを募集。

会計:会計が大会の会計も行う、大会との連携の為にも作業のマニュアル化を目指す。

大会/年会:コロナの為今回は特殊になる可能性はあるが、できるだけ今後に引き継げるように学会と連携して進める。

学術企画:今年も1つ以上の他学会での連携シンポジウム開催を企画する。病態関連やマルチオミクスなどで他分野と融合した企画を通じてプロテオームの盛り上げを目指す。グループメーリングリストなどを通じて皆様の企画アドバイスを募集し活用したい。技術の相談窓口となれるような、グラントの獲得も目指したい。

HUPOと連携した企画も行いたい。質量分析データ利用についてもJPOSTのメンバーの方と連携したい。

国際:コロナ下で自由な海外渡航が制限されている中でWebinarは必要と考えられるので進めたい。

学会誌編集: Proteome Letters は大槻が担当、JPDMが奥田担当、JPDMは現在jPOSTに関わるメンバーの投稿に限られているため、今後より広く投稿のお声がけをする予定。

教育:コロナ下のため、on siteの開催は難しいため企画、広報と連携してWebinarでの開催を進める(Wet~Dryまで)。

4. 前期理事からの引き継ぎ(引継ぎ期間:2021年1月~3月)

(1) 石濱前会長より統括

● 伝統の堅持の希望:

事務委託をしない団体、年会費の安い団体の堅持。

産官学が近い団体。

フラットな団体、新しい人にやさしい団体。朝長会などの維持も希望。

● 前期の成果

学術団体登録申請を行い登録予定。

納税団体化(会計事務所との関わりについての議論必要)。

JPDMの創刊、Proteome lettersの継続的な発刊。

● 今期に期待したいこと

多くの人が参加できるプロテオームをメインとしたグラントの獲得。

HUPO/AOHUPOをはじめとする国際学会・国際的活動との関わり(JPrOSは国内に閉じており、もっと積極的にすべき、対策の議論を期待)。

With/after corona: Webの積極利用、他大会との共催の積極的な継続も期待。

その他:

・前理事の任期は2020年12月で終わっているが、2021年1~3月までの引継ぎは必須。

・理事期間3年~2年への短縮の検討を。

・JPrOSはKHUPOとの連携はあるが、それ以外のアジアのプロテオーム学会との連携が非常に低いのは問題。

以下、JPrOSを代表して執筆したMCPの論文。

[https://www.mcponline.org/article/S1535-9476\(21\)00021-9/fulltext](https://www.mcponline.org/article/S1535-9476(21)00021-9/fulltext)

・JPDMに関連して、JPrOSとして予算申請中。今期の理事会でも継続を希望。また、学会予算からの支出は、J-STAGEの使用料のみ。

(2) 他前理事からの引き継ぎコメント

・庶務について、丁寧な引継ぎが必要と考えており、4月までにまとめて引継ぎを行う予定。学術団体登録作業が継続中であるため、4月までは対外窓口は新潟大学に維持する予定。

・教育について、講習会を通じて学会へのリクルートができたので、引き続きwebでの教育等による学会員のリクルートに期待(参加費と会費の兼ね合いの検討等)

・会計について、通帳(大会用が2つと学会用が1つ)の引き継ぎ整理が必要、会計事務所の利用は必要、引き続きコストダウンの可能性を要検討

・学術企画について、分子生物学会、生化学会など他学会でのワークショップの開催を行った。学術企画は広報、教育などの要素を含み、若手のリクルートや、他分野のシニア研究者との共同研究などにアピールするための重要な役割と考えられる。今後は、これらの役割に加え、国際的なプレゼンスを出す部分を期待(現状、世界的にJPrOSの認知度が低い)。

・学会誌について、年間6論文(3本 x 年2回)の出版を続けられた。ただ、著者の募集に苦労したので、今後何らか著者へのインセンティブの議論が必要。

(2) その他議論

・Proteome lettersの担当者人数増員について議論された。

5. 審議事項: 徳島大学先端酵素学研究所「酵素学研究拠点」認定申請に関する要望書について

日本プロテオーム学会として徳島大学先端酵素学研究所を「酵素学研究拠点」認定を要望する旨の承認

依頼があり、承認された。(本申請は、今年度のプロテオーム学会大会、去年度のトレーニングコースや学会の共催にも関わっている。)

6. JPrOS2021について(小迫)

日程: 7/21(火)~7/22(水)日に開催決定

場所: 徳島大学内、大塚講堂、藤井節郎記念ホール

組織委員:

大会長: 小迫英尊(徳島大学)

副大会長: 足立淳(医薬基盤・健康・栄養研究所)、堂前直(理化学研究所)

庶務: 木村弥生(横浜市立大学)、阿部雄一(愛知県がんセンター)

会計: 杉山直幸(京都大学)、荒川憲昭(国立医薬品食品衛生研究所)

広報: 木下英司(広島大学)、近藤格(国立がん研究センター)

プログラム編成: 小林大樹(新潟大学)、幡野敦(新潟大学)、増田豪(熊本大学)、今見考志(京都大学)、田中恒平(田辺三菱製薬)

登録システム: 奥田修二郎(新潟大学)、曾川一幸(麻布大学)

プログラム集: 川島祐介(かずさDNA研究所)、松本俊英(北里大学)

会場: 立川正憲(徳島大学)、吉川治孝(徳島大学)

企業展示・ランチョンセミナー: 堂前直(理化学研究所)、肥後大輔(サーモフィッシャー)

開催形式:

- ・現地開催及び、オンデマンド配信(事前に別撮りしたものを配信)のハイブリット形式を検討。
- ・直前に徳島大学でクラスターが発生した場合は中止。
- ・通常は、手作りでの学会開催を心がけているし、その趣旨も十分理解しているが、今回はコロナを鑑み、コンフィット社を利用予定(スタートアッププランに参加登録、参加証、領収書の発行、ホームページも組み込まれている。)一部契約済み。
- ・懇親会は中止。
- ・共催(協同拠点利用事業、トランスオミクス事業)。
- ・他学会の開催情報をいただきたい。
- ・皆様、ぜひ広告を募っていただきたい。
- ・プログラムのアウトラインも決定している、招待公演演者も決定している。

理事会参加者での意見交換:

外部学会運営業者の利用と我々が独自に持つシステム利用の利点、欠点について議論された。

コロナ禍の中での開催手法の確定について議論された。

海外学会との連携について議論された。

オンライン開催の手法について議論された。

7. JPrOS2022について

開催場所および大会長の検討を行った。

8. その他

(1)理事任期について

今回の理事は3年任期と決まっているが、次期からは2年任期を検討しても良いのでないだろうか？
すぐに決めることではないが、引き続き議論の継続を。

(2)次回の理事会

次回の理事会は3月に開催予定でいる。前期理事会と新理事会の引継ぎ状況の確認、2021年大会の準備状況についての情報共有、2022年大会の大会長・開催場所の審議、などを行いたい。

(3)その他

各担当での引継ぎとして、Zoomブレイクアウトルームを活用し、各担当での引継ぎについての議論を行った。